

様々な口の機能

食べる（摂食嚥下）



母乳を飲むのは本能ですが口から食べる事は学習です。成長発達に応じたしっかりとした練習が大切です。

会話する



声帯で発声され 舌や唇その他口の働き（形や容積を変化させる）で言葉になります。

呼吸する



口は呼吸路であります。正常な呼吸は鼻呼吸です。いつも口で呼吸するというような問題点が生じる可能性があります。（口呼吸による問題点ご参照ください。）

唾液の分泌



唾液の中にはでんぷんを消化するアミラーゼが含まれています。また、口の中を潤すことで粘膜を保護します。その他、抗菌作用や免疫成分を含んでいることで「細菌感染」や「がん」を予防する働きがあるといわれています。

味覚（感覚器）



味覚は食べる楽しみの大きな要素です。舌の表面にある味蕾（みらい）で食べ物の味を感じます。その他、味には嗅覚、視覚、温覚、圧覚、触覚が関係しています。触覚については、（指先と唇どちらが紙の薄さを判別できるかという検査をしたところ、唇の方が薄さを判別できたという報告があります。）

食べることは学習です!! 正しい食べ方を身につけましょう!

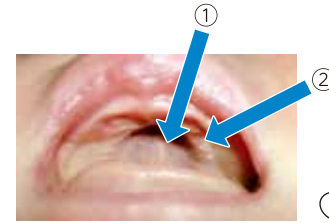
哺乳期

持って生まれた哺乳反射（原始反射ともいう）（乳探し反射・吸啜反射*1）により赤ちゃんの意思に関係なく、お乳を飲むことができます。

- * 1 「乳探し反射」
- ・乳首を口に取り込もうとする反射
 - 「吸啜反射（きゅうてつはんしゃ）」
 - ・口に入ってきた乳首を舌で上顎に押し付けながらチュウチュウと吸う反射
- （通常、哺乳反射は、生後6～7か月ころに消失します。）

※この時期の注意

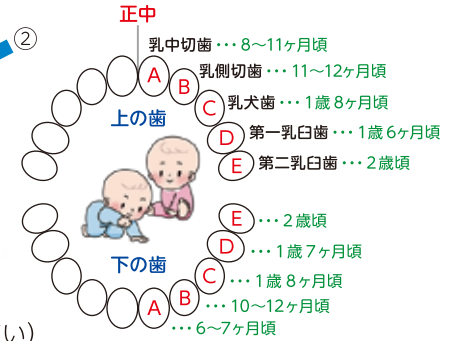
上顎の中央にある吸啜窩というくぼみに乳首が深く収まればよいが、乳首だけをくわえる「浅飲み」だと吸う力が発達しにくくなります。



乳幼児前半の口腔の形態特徴

- 上顎：
①吸啜窩（きゅうてつつか）
②傍歯槽提（ぼうしそうてい）

乳歯の生える時期



		舌の動きと食べ方の特徴	硬さの目安と離乳食の形態
離乳初期	ゴックン期 (口唇食べ期) 5～6か月	口唇を閉じて、ゴックンと飲み込めるようになります。舌は前後にしか動きません。 	かたまりのないなめらかなトロトロ状から、発達に応じて水分をとばし、ベタベタ状にしていきます。裏ごしタイプのベビーフードが良いお手本です。
離乳中期	モグモグ期 (舌食べ期) 7～8か月	乳前歯萌出開始 舌が上下にも動くようになり、離乳食を舌で上顎に押しつけてつぶします 	つまむと簡単につぶれるような柔らかさに調理します。飲み込みやすいよう、トロミづけをすることも必要です。
離乳後期	カミカミ期 (歯ぐき食べ期) 9～11か月	舌が左右にも動くようになり、離乳食を歯ぐきのほうへ移動させ、歯ぐきでかみます 	つまんでみて、少し力を入れるとつぶれるくらいの硬さにします。手づかみしやすい形にすることも大切
離乳完了期	幼児食期 (歯食べ期) 1～2歳代	カミカミ期の延長です。舌が自由自在に動かせるようになります。歯が生えるに従って、かむ運動が完成します 	カミカミ期の続きと考え、つまんで力を入れるとつぶれるくらいの硬さから始めます。3歳までは柔らかめに調理を